

三十九年前の回顧：回顧録（一）

著者	山田, 準
雑誌名	龍南
巻	238
ページ	9-10
発行年	1937-10-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/7395

て坪が無くなつてから、自然に止まりました。今棒を振つて見ても体力が衰へて物になりませぬ。盛んな頃、夜街路に出て一揮すると前を行く人が腰をぬかした事もありました。

大正十四年の春、丁度三十年目に熊本を訪ひました時に、

逐浪隨波了夙緣。功成事敗只聽天。盧生一夢任頭感。自別青山三十年。

とやつて見たが、筆端梗塞して、まだ眞の胸中を詠じ盡して居ませぬ。今日の私はもう世間には何の執著も持つて居ませぬが、

秋雨を淋しがる我にまた生命あり

といふ位の気分は残つて居ます。

三十九年前の回顧

山 田 準

自分が五高教授に就任したのは三十九年前即ち明治三十二年の九月で三十三歳の時であつた。其時漢文の長尾慎太郎教授が東京へ榮轉したので兒島獻吉郎教授が代つて主任となり、自分が其缺位を充たしたのである。始めて九州の地を踏み五高に到着して其の雄大なのに驚いた。

初めに中川校長に面會したが、循々と話される態度は謂はゆる老婆親切であつた。次に櫻井幹事に面會したが、これは嚴肅の態度に打たれた。松本教頭の瀟洒と夏目（漱石）教授の簡素とは善き對照であつた。翌年夏目教授が教頭になつたが、その態度は嚴肅其物であつた。誰も後日の文豪を豫想するものは無かつたであらう。

獨逸語に上田、藤井、青木、小島の四教授が揃つて居た。漢文とは妙に意氣投合の姿で往來が繁げかつた。神谷工學士

は自轉車の習ひ初めであつた。武藤教授の學究的、黒本教授の古武士的、園教授の古典的は、今に眼底に残る。教授會では篠本教授の諤々は通り物であつた。生徒では漢文の湯淺廉孫、柳井幸弘二氏は一方の雄であり、山崎達之輔氏も下級に入つて來た。

松橋方面に演習があつて諸教授と生徒の家に泊り、不案内の爲め酒を強ひらるゝまゝ飲みすごして閉口したことがある。休日には兒島、落合二教授とよく散策し、一度は耶馬溪に遊んだ。市内では武藏殿男老人と懇意にした。三十四年の六月となつて、教授時間の都合で漢文教授減員の際、鹿兒島に七高の再興があつて岩崎館長に呼ばれて轉任した。

自分の五高在職は滿二年の短時日であつたが、始めて官立校に就職したのであつたから、自分の精神生活の上に大なる力となつて或る物が與へられた。今は七十一歳の老骨となつたが、下世した多くの僚友の上に思ひを馳せながら此稿を綴る。

回 顧

高 島 喜 市

五高在職は、明治四十年四月から同四十三年七月までの間で、校長松浦寅三郎先生の時代に當ります。當時の教官は多く制服制帽を着け、雨の時など足駄履きの人も目に立ちました。これは泥濘の中を涉るには極めて必然的な用意であつたと思ひます。従て新任の少壯教官が、背廣に穿靴は寧ろ異様に感ぜられたことせう。又武夫原や龍田山に颯爽英姿を現はした生徒諸氏の中には、歩兵大尉とか二等軍醫とか、嚴めしき肩書の人もあつて、若輩余にとりては正に兄貴分に當るのですが、日露の戦塵收まつて間もなき頃ですから、尤のことゝ首肯せられます。爾來春風秋雨三十年、熊本の風物、人物、茫洋として輪廓の定かならぬものがありますが、剛毅朴訥だけは正に健在のことゝ信じます。遙に校運の隆昌を祈念して止みませぬ。